
金糸銀糸

向山 葉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金系銀系

【Nコード】

N3281S

【作者名】

向山 葉子

【あらすじ】

あの火事の時までは母の顔を覚えていたような気がするのだが、今となっては母の顔を思い起こそうとしても炎の記憶がそれを邪魔してしまう。……

【初出】月刊「武州路」昭和六十三年七月号（通巻一七九号）

【再録】ウェブサイト「西向の山」平成十五年四月

金系銀系

向山 葉子

あの火事の時までには母の顔を覚えていたような気がするのだが、今となつては母の顔を思い起こそうとしても炎の記憶がそれを邪魔してしまう。めらめらとあっけなく燃え尽きていく家の思い出とともに、私は母とのこまやかな記憶をも燃やしてしまったようだった。火の回りが早く、父は私を負うて逃げるのが精一杯だった。身のまわりのものすらも持ち出せないまま、母を偲ぶがはすべて失われてしまった。ただひとつ、残像のように、たおやかな後ろ姿のイメージだけが私に残された。

私は時折、その唯一の糸をたどつて母を思い起こそうと試みる。しかし、浮かび上がってくる記憶、のようなものは甚だ曖昧で、確かに見た出来事なのか、それとも何かのきっかけで創られたイメージネーションなのかははっきりしない。がそれは、私の脳裏で幾度も幾度も反復されて、今ではあたかも映画の一場面のように色さえも鮮やかに思い描くことができる。

窓を大きくとつた、陽光のよく入る部屋だ。霞のように淡い光が母の後ろ姿を浮かび上がらせている。ほんのりとぼかされた紫色の着物に身を包み、何か物を思う風に母の像は静まっている。窓から風が入るたびに、袖に描かれた可憐な花々がかすかに揺れるのだ。しゅっという衣擦れの音がさやかに耳を打ち、その足が少し自墮落に横に崩される。と、今まで光の加減で認められなかったお太鼓の帯の二匹の胡蝶の金系銀系が凜としてきらめくのだった。

そして私はいつも、そこから母を振り向かせようとしては失敗す

るのだ。どんな女の顔をはめこんでみてもしっくりこない。あらゆる面影を当てはめることに飽くと、私の思考はようやく現実へと戻ってくるのだった。

「考えごとは終わった？」

いつの間に現れていたのか、宗田夫人の艶冶な微笑みが目前にあった。

からかうように笑う夫人の顔は、今年四十五になるというのにいっつこうに凋落の気配をみせない。娘時代のポートレートを画面に蘇らせて詰め込んだようなのだ。子供を持たないせいだろうか。

「いまさら今日子の写真が見たいなんていうから、苦労しちゃったわ。この一枚探すのに昨日一日かけたのよ」

夫人はバッグから、封筒を取り出しながら言った。ここには今日子、つまり母の写真が入っているはずだった。私はいざその封筒を前にしてしまうと、何だか落ち着かない気分になり、急に不安になった。ためらう私を夫人は楽しげに眺めている。

「見ないの？」

夫人のその口調に私は危険な匂いをかいだ。夫人は明らかに何かを期待している。私は封筒をそのままポケットに仕舞い込んだ。

「家に帰ってからじっくりと見ますよ」

「まあ、残念。劇的な親子対面が見られると思ったのに。それじゃ、今日子の話を少ししましよ。あなた、顔は覚えてないのよね。他に覚えてることって、本当にあの場面だけなの？」

「ええ、何度思い出そうとしても、あれしか浮かんでこないんです」「おかしいわねえ。あなたのこと、あんなに慈しんで育てたのに子供なんて薄情なもんね」

夫人は白い喉をくつと鳴らして、コーヒーを飲み干した。伸ばされたきめの細かい喉は何かの強い決意に支えられているかのように毅然とした感じがした。

「でも今日子は幸せだわ。美しいイメージとなってあなたの中に生きていくんですもの。ね、もう一度話してくれない？ 今日子のイ

メージ」

私が話す間中、夫人は夢をみるようなうつとりした表情で聞き入っていた。まるで自分への讃辞を聞く、王妃のように。

「あら、もうこんな時間。そろそろかえらなくちゃ。宗田が帰ってくるわ」

夫人は左手首の時計にちらと目をやり、いそいそと立ち上がった。「じゃ、御対面の感想、楽しみにしてるわ」夫人はレシートをひらりと取り上げると、レジへ去りながら手だけをこちらに振ってみせた。私は当然のようにその後ろ姿を見つめた。そして私の目は一瞬、凍りついたように夫人のお太鼓の帯に釘づけになった。あの金糸銀糸の刺繍の文様……。

私はぼうぜんとして冬の歩道を歩いていた。内ポケットの中で母の写真がかすれたかさかさという悲鳴をあげた。私は立ち止まり、そのもだえる薄い一枚に静かに火をつけた。火は一瞬青い炎を発し、瞬く間に燃えつきた。

(了)

(後書き)

掌篇小说『金糸銀糸』向山葉子

【初出】月刊「武州路」昭和六十三年七月号(通卷一七九号)

【再録】ウェブサイト「西向の山」平成十五年四月

(C) 1988 Mukouyama Yoko

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3281s/>

金糸銀糸

2011年9月6日20時50分発行